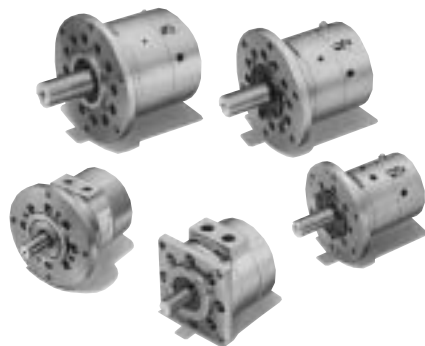


最高使用圧力7MPaのベーンタイプ

- シングルベーン・ダブルベーンを標準化しました。
- シングルベーンタイプはクッション付もあります。
- シャフトに平行キー(片丸)を標準装備しました。



仕様 / 標準形

機種	ベーン形式	揺動角度	接続口径	内部容積 cm ³	内部漏れ量 cm ³ /min (40 時)	許容慣性ギ J	許容荷重N		質量 kg	備考
							ラ ジ ア ル 重	ス 荷 ラ ス ト 重		
70RV 10	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc1/8	10	10	0.013	9.81	4.90	1	標準 受注 対応
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		6.5	20					
70RV 15	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc1/8	17	15	0.025	19.6	9.81	2	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		11	30					
70RV 20	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc1/8	24	20	0.046	49.0	24.5	3	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		16	40					
70RV 30	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc1/8	51	30	0.088	78.5	39.2	4.3	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		34	60					
70RV 100	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc1/4	111	50	0.255	147	68.6	10.2	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		74	100					
70RV 200	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc3/8	221	100	0.510	294	137	20.0	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		147	200					
70RV 400	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc3/8	435	100	0.755	343	167	32	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		290	200					33
70RV 700	シングル	270° ⁺³ / ₀	Rc1/2	780	100	0.912	343	167	41	
	ダブル	90° ⁺³ / ₀		520	200					43

共通項目

- 適合作動油：一般鉱物性作動油(その他の作動油をご使用の場合は、別途ご指示ください。推奨作動油ISO VG32 - 56(ISO粘度グレード)
- 呼び圧力：7MPa
- 最低作動圧力：1MPa
- 耐圧力：10.5MPa
- 使用流体温度：0 ~ +60 (ただし、凍結なきこと)
- 屋内環境で使用してください。
- 粉塵や振動の激しい所では使用しないでください。
- 注) ● 内部構造については、巻末の内部構造図を参照してください。
- 負荷の慣性により、アクチュエータ内に発生する油圧力は、耐圧力以内にしてください。

作動油との適合性

適合作動油				
一般鉱物性作動油	水グライコール系作動油	リン酸エステル系作動油	W/O作動油	O/W作動油
		×	×	×

仕様 / クッション付

機種	ベーン形式	揺動角度	接続口径	内部容積 cm ³	内部漏れ量 cm ³ /min (40 時)	許容荷重N		質量 kg
						ラ ジ ア ル 重	ス 荷 ラ ス ト 重	
70RV 10	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc1/8	6.5	10	9.81	4.90	1.2
		90° ⁺³ / ₀		3.3				
70RV 15	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc1/8	11	15	19.6	9.81	2.4
		90° ⁺³ / ₀		5.5				
70RV 20	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc1/8	16	20	49.0	24.5	3.3
		90° ⁺³ / ₀		8				
70RV 30	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc1/8	34	30	78.5	39.2	4.7
		90° ⁺³ / ₀		17				
70RV 100	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc1/4	74	50	147	68.6	13.5
		90° ⁺³ / ₀		37				
70RV 200	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc3/8	147	100	294	137	25.7
		90° ⁺³ / ₀		73.5				
70RV 400	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc3/8	290	100	343	167	34
		90° ⁺³ / ₀		145				
70RV 700	シングル	180° ⁺³ / ₀	Rc1/2	520	100	343	167	44
		90° ⁺³ / ₀		260				

クッション仕様

機種	項目	最大慣性モーメント kg·m ²	最大突入角速度 rad/s	クッション角度 rad(度)	最大吸収エネルギー J					
					使用圧力 MPa					
					2	3	4	5	6	7
70RV 10	0.098	10.4	0.34(20°)	2.06	1.77	1.47	1.18	0.883	0.588	
70RV 15	0.196	10.4	0.43(25°)	4.81	4.12	3.43	2.75	2.06	1.37	
70RV 20	0.294	10.4	0.43(25°)	7.55	6.47	5.39	4.31	3.24	2.16	
70RV 30	0.588	10.4	0.43(25°)	15.1	12.9	10.8	8.63	6.47	4.31	
70RV 100	1.47	8.7	0.43(25°)	30.9	26.5	22.1	17.7	13.2	8.83	
70RV 200	3.92	6.9	0.43(25°)	78.9	67.7	56.4	45.1	33.8	22.6	
70RV 400	6.86	5.2	0.43(25°)	137	118	98.1	78.5	58.8	39.2	
70RV 700	13.7	4.3	0.43(25°)	251	215	179	143	107	71.6	

注)トルク効率を考えると使用圧力は2MPa以上を推奨しますが、やむをえず2MPa以下で使用する場合は最大吸収エネルギーは、使用圧力2MPaの時と同じです。

汎用形

●標準形

70RV 10 S - 270

●クッション付

70RV 10 S C - 180

種類
10・15・20・30・100・200・400・700S シングルベーン
D ダブルベーン

標準形

270 270°(シングルベーンのみ)

90 90°(ダブルベーンのみ)

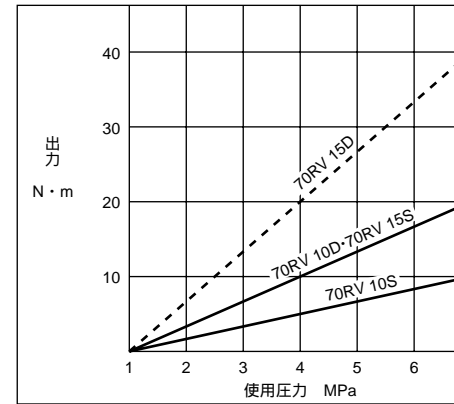
クッション付

90 90°

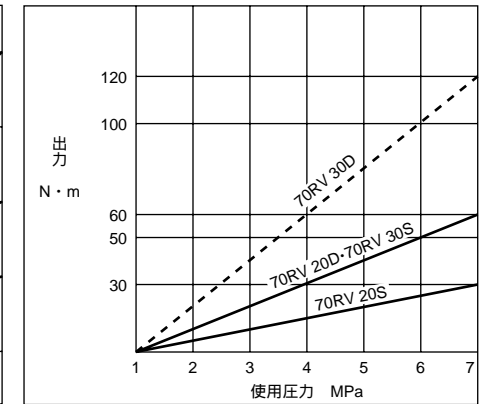
180 180°

出力特性図(理論トルク)

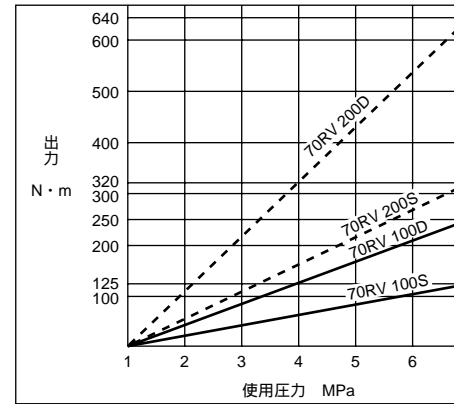
70RV 10・15



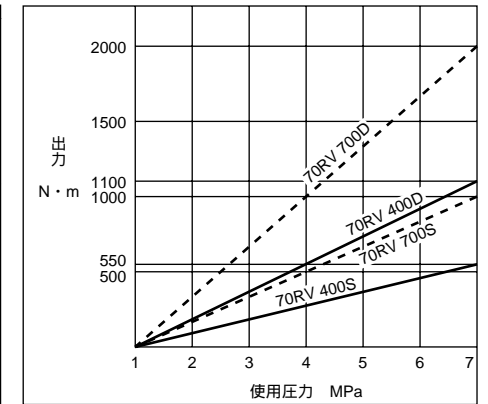
70RV 20・30



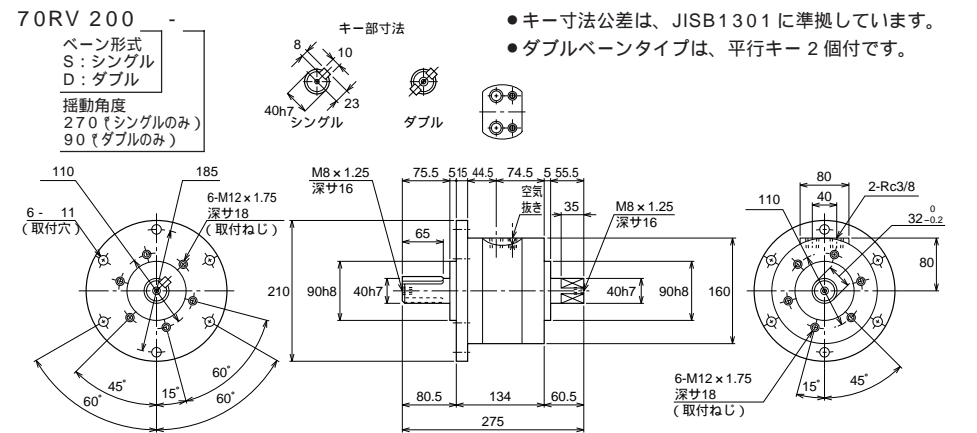
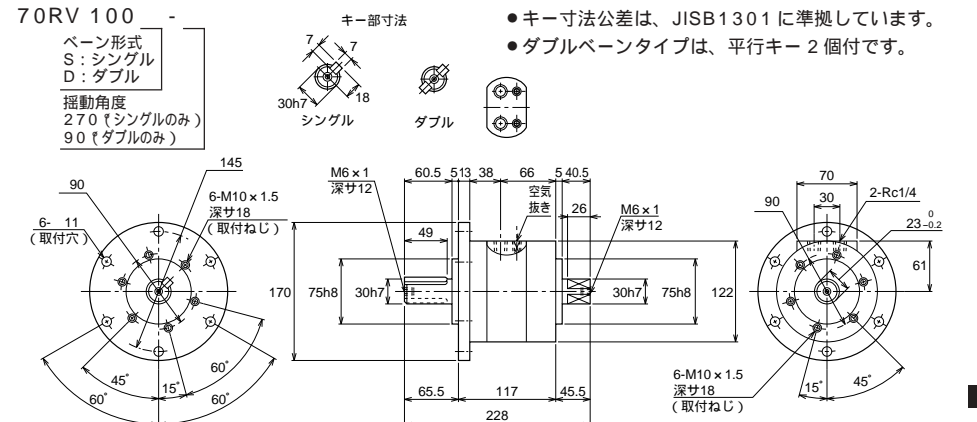
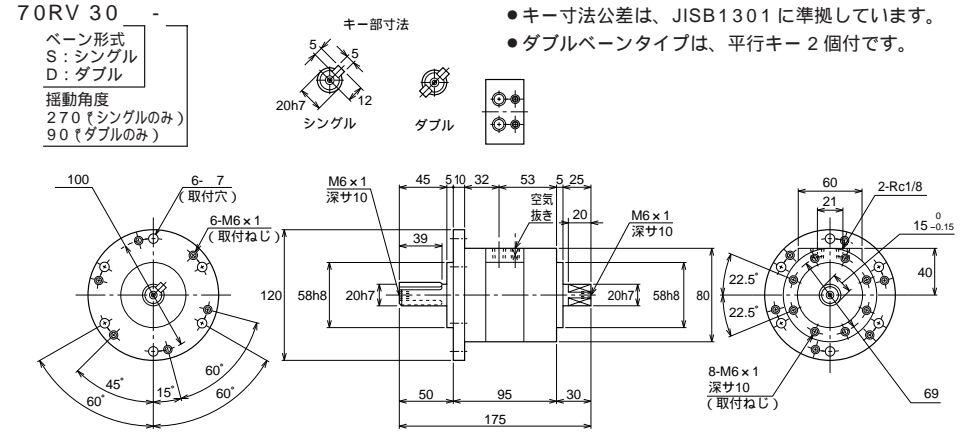
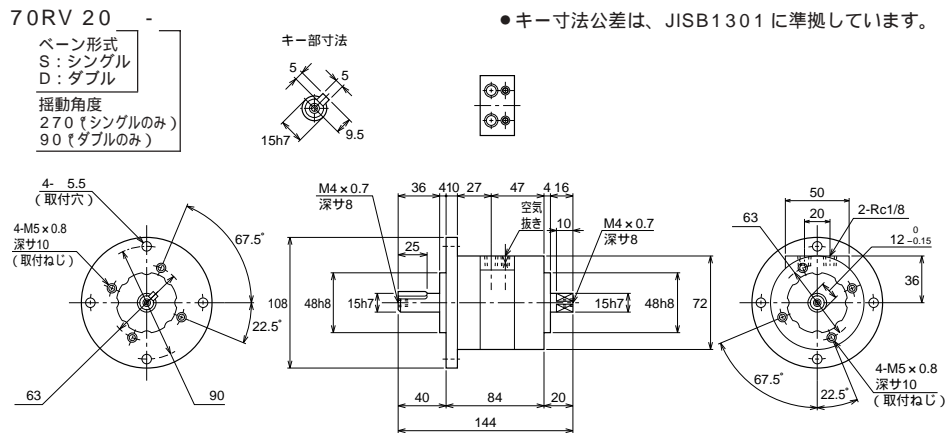
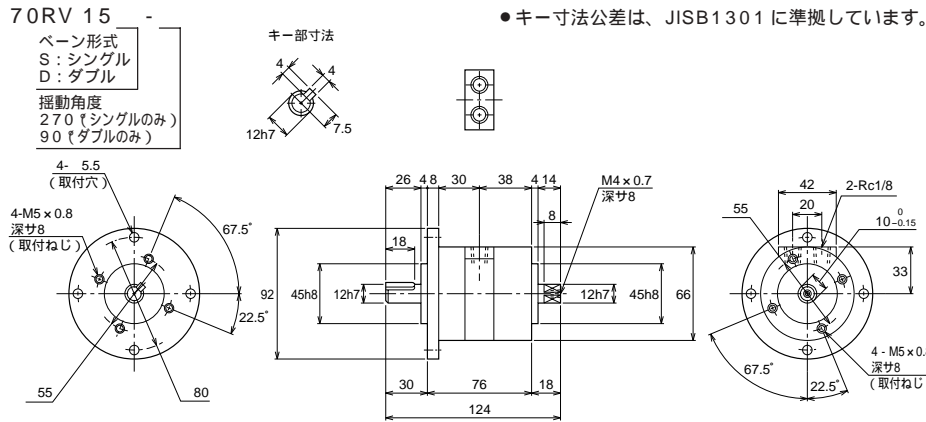
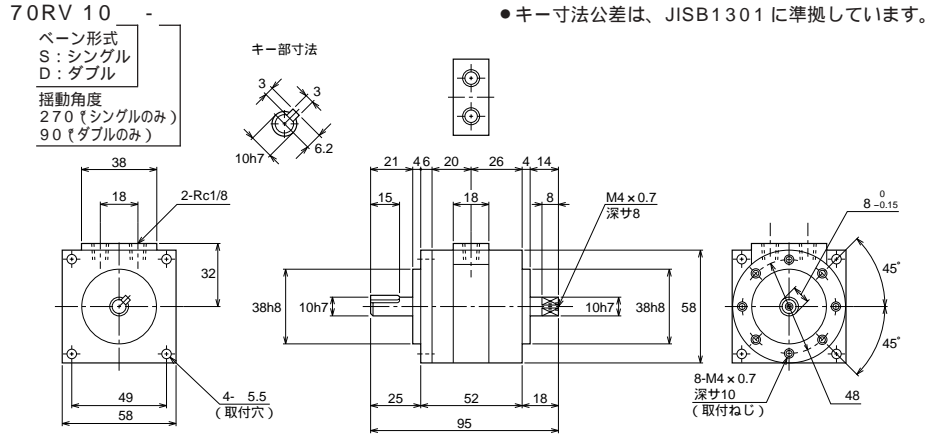
70RV 100・200



70RV 400・700



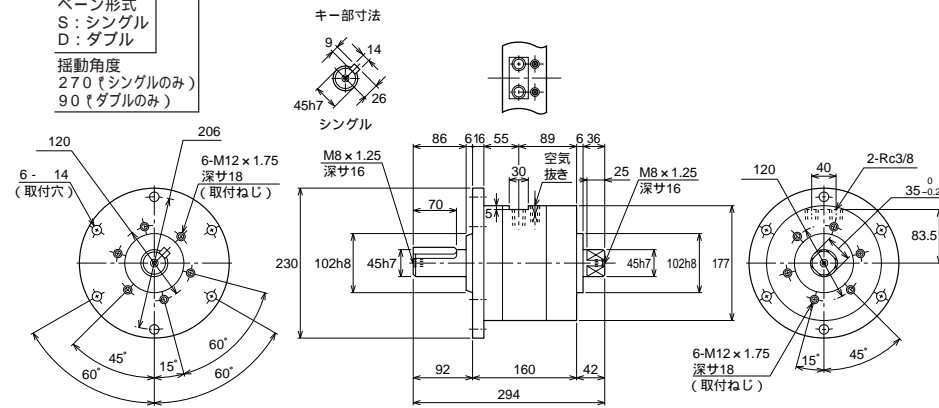
●標準形・クッション付共用です。



70RV 400

ベーン形式
S: シングル
D: ダブル
揺動角度
270° (シングルのみ)
90° (ダブルのみ)

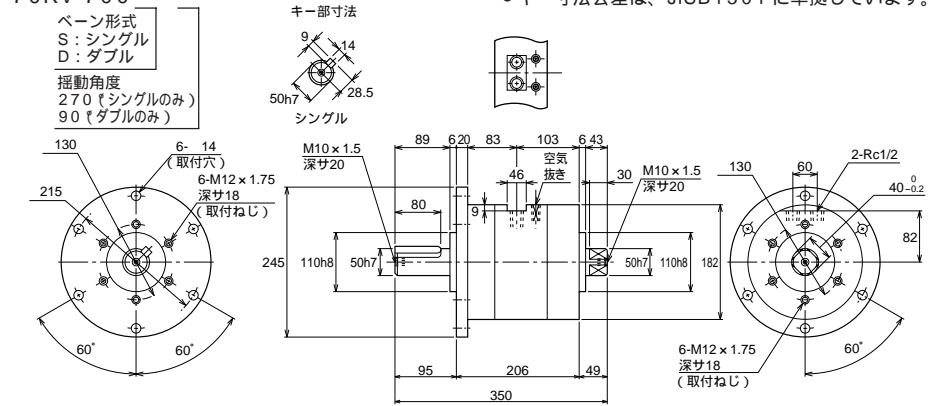
●キース法公差は、JIS B 1301 に準拠しています。



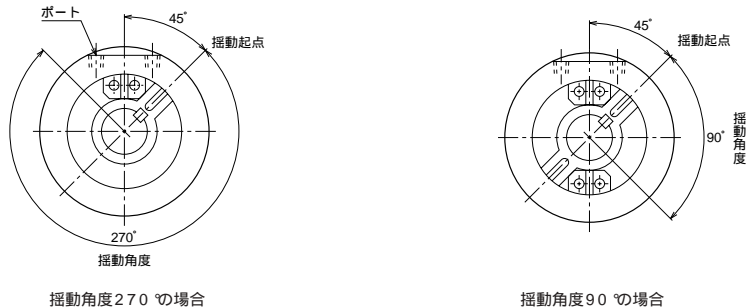
70RV 700

ベーン形式
S: シングル
D: ダブル
揺動角度
270° (シングルのみ)
90° (ダブルのみ)

●キース法公差は、JIS B 1301 に準拠しています。



フロント側からみた揺動起点と揺動角度 / 標準形

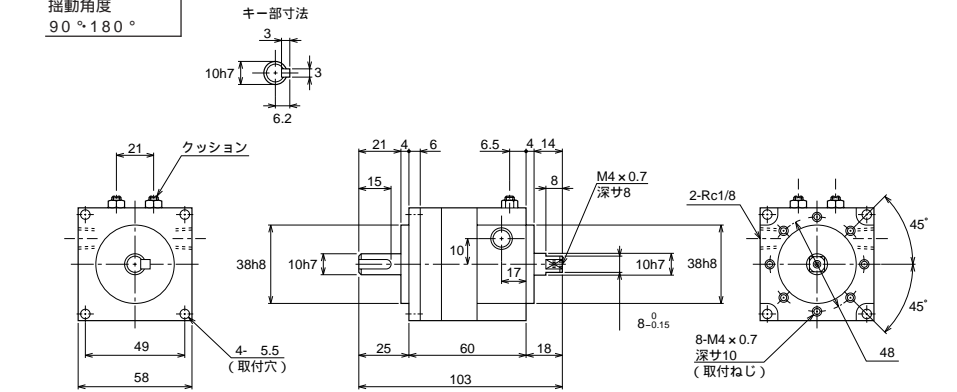


●ポートに対して45°の位置(平行キーの位置)が揺動起点です。

70RV 10SC

揺動角度
90° ~ 180°

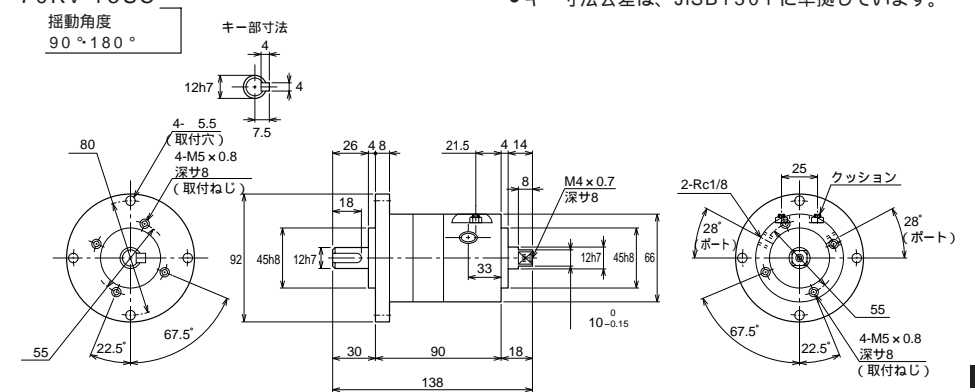
●キース法公差は、JIS B 1301 に準拠しています。



70RV 15SC

揺動角度
90° ~ 180°

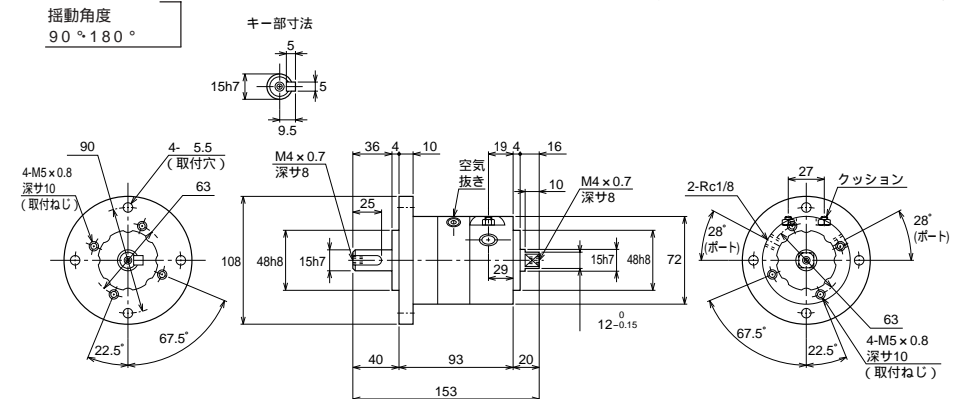
●キース法公差は、JIS B 1301 に準拠しています。



70RV 20SC

揺動角度
90° ~ 180°

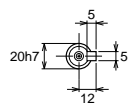
●キース法公差は、JIS B 1301 に準拠しています。



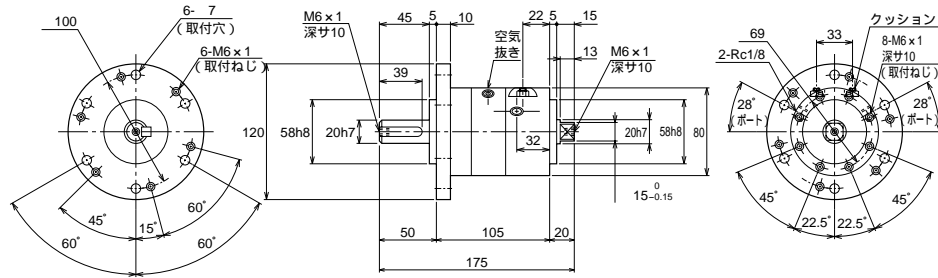
70RV 30SC

揺動角度
90°~180°

キー部寸法



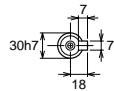
●キー寸法公差は、JISB1301に準拠しています。



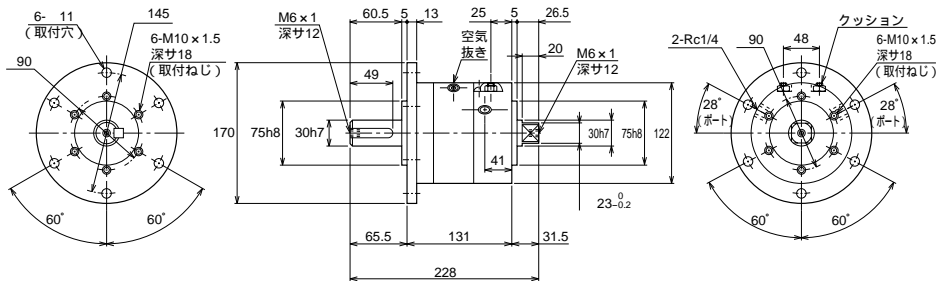
70RV 100SC

揺動角度
90°~180°

キー部寸法



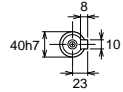
●キー寸法公差は、JISB1301に準拠しています。



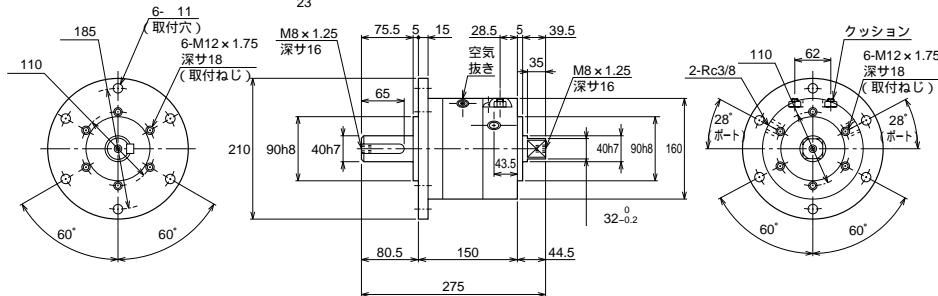
70RV 200SC

揺動角度
90°~180°

キー部寸法



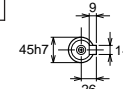
●キー寸法公差は、JISB1301に準拠しています。



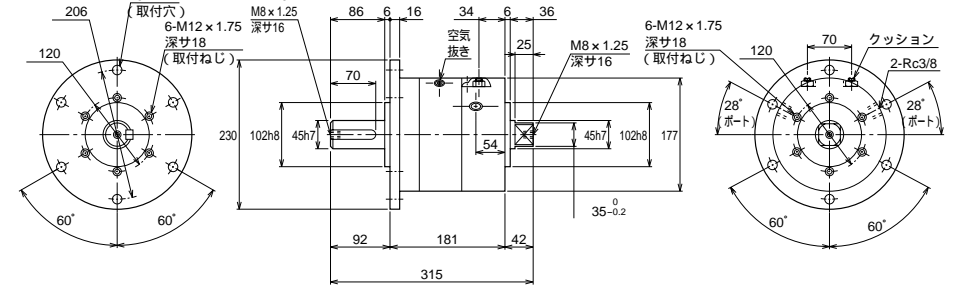
70RV 400SC

揺動角度
90°~180°

キー部寸法



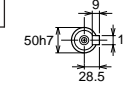
●キー寸法公差は、JISB1301に準拠しています。



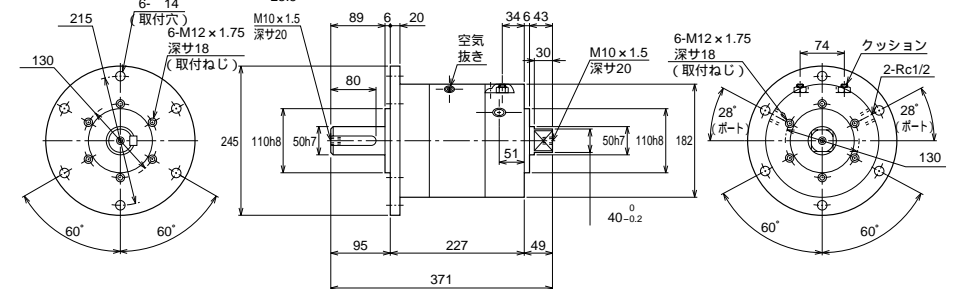
70RV 700SC

揺動角度
90°~180°

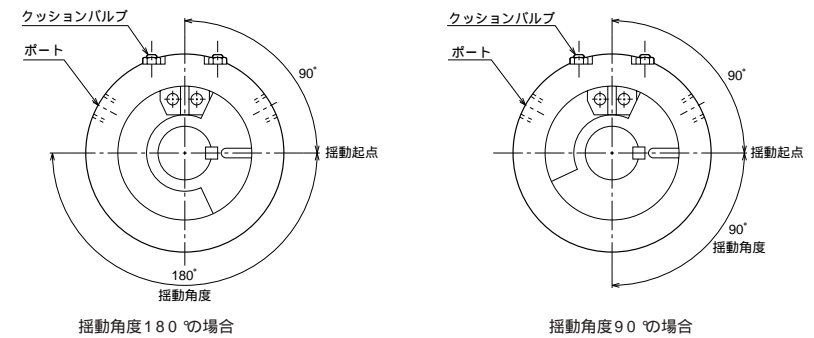
キー部寸法



●キー寸法公差は、JISB1301に準拠しています。



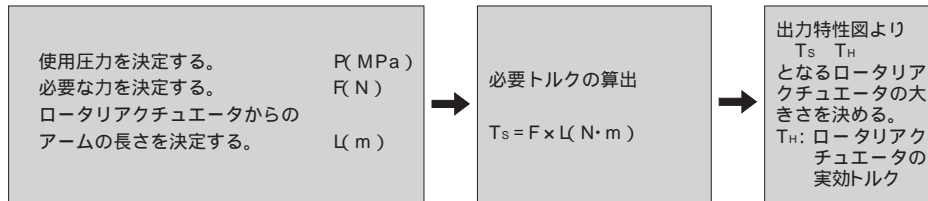
フロント側からみた揺動起点と揺動角度/クッション付



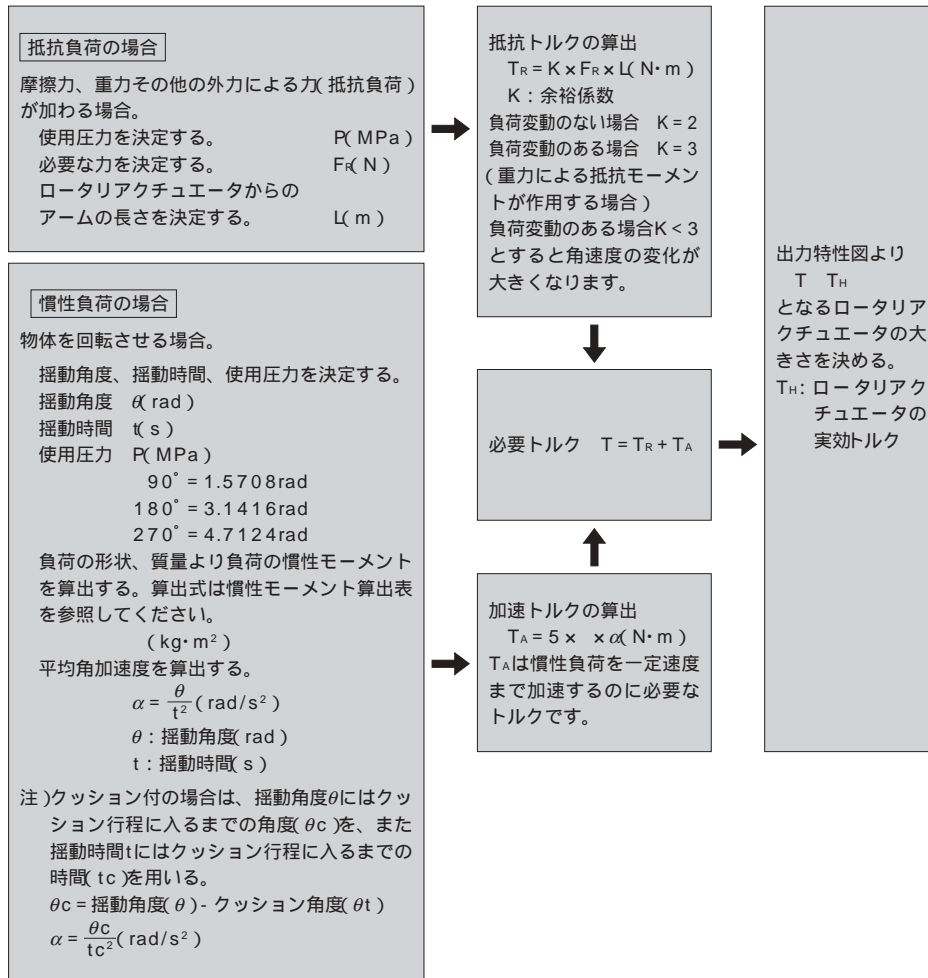
●クッションバルブに対して90°の位置(平行キーの位置)が揺動起点となります。

1. 大きさの選定

クランプなど単なる静的な力が必要な場合



負荷を動かす場合



2. 許容慣性エネルギーのチェック

慣性負荷の場合、負荷の慣性エネルギーはロータリアクチュエータの許容慣性エネルギー以下で使用してください。

平均角速度の算出 $\omega = \frac{\theta}{t}$ (rad/s)

θ : 揺動角度 (rad) t : 揺動時間 (s)

衝突角速度 ω_0 を算出する

$\omega_0 = 1.2\omega$ (rad/s)

負荷の慣性エネルギーの算出

$E = 1/2 \omega_0^2 J$ (J)

: 負荷の慣性モーメント ($\text{kg} \cdot \text{m}^2$)

④負荷の慣性エネルギーEがロータリアクチュエータの許容慣性エネルギー以下であることを確認してください。

許容慣性エネルギーを超える場合はより大きいサイズのロータリアクチュエータもしくは、クッション付を選定してください。

3. クッション能力の確認(クッション付の場合)

負荷の形状、質量から慣性モーメントを求め、負荷範囲であることを確認してください。 max ($\text{kg} \cdot \text{m}^2$)

クッションに突入するときの衝突角速度が最大衝突角速度以下であることを確認してください。

$\omega = \frac{\theta_c}{t_c}$ (rad/s)

$\omega_0 = 1.2\alpha$ (rad/s) ω_0 ω_{max}

 θ_c : クッション行程に入るまでの角度 (rad) t_c : クッション行程に入るまでの時間 (s) ω : 平均角速度 (rad/s) ω_0 : 衝突角速度 (rad/s)負荷の慣性モーメントと衝突角速度から、衝撃エネルギーを求める。
 $E_1 = 1/2 \omega_0^2 J$ = 慣性モーメント ($\text{kg} \cdot \text{m}^2$) ω_0 = 衝突角速度 (rad/s)

クッションストローク中に受ける外力によるエネルギーを求める。

$E_2 = (Mg + Mf) \theta_t$ (J) E_2 : 外力によるエネルギー

Mg: 不釣合負荷による重力モーメント (N・m)

$Mg = L \times Fg$ Fg : 負荷重力による力 (N)

釣合負荷あるいは水平面で運動する場合はMg=0とおく

Mf: その他の推力(例えばシリンダ力が作用する場合)により発生するモーメント (N・m)

$Mf = L \times Ff$ Ff : 推力 (N)

その他の推力が無い場合はMf=0とおく

θ_t : クッション角度 (rad)

 $E_1 + E_2$ が最大吸収エネルギー以下であることを確認してください。

以上、すべての確認事項が満足すればOKです。一つでも満足しない場合には使用できません。

吸収能力のもっとも大きな緩衝機器(ショックアブソーバ)が必要です。

“TAIYOショックアブソーバ総合カタログ”を参照してください。

慣性モーメント算出表

形状	略 図	必 要 事 項	慣性モーメント (kg・m ²)	回転半径K _i ²	備 考
円盤		直径 α (m) 質量 M (kg)	$= M \cdot \frac{d^2}{8}$	$\frac{d^2}{8}$	
段付円盤		直径 d1 (m) d2 (m) 質量 d1部分 M1 (kg) d2部分 M2 (kg)	$= M_1 \cdot \frac{d_1^2}{8} + M_2 \cdot \frac{d_2^2}{8}$		d1部分に比べてd2部分が非常に小さい場合は無視してよい
棒(回転中心が端)		棒の長さ l (m) 質量 M (kg)	$= M \cdot \frac{l^2}{3}$	$\frac{l^2}{3}$	棒の幅が長さ(l)の30%以上の時は直方体で計算する
直方体		辺の長さ α (m) β (m) 重心までの距離 l (m) 質量 M (kg)	$= M \left(l^2 + \frac{a^2 + b^2}{12} \right)$	$l^2 + \frac{a^2 + b^2}{12}$	
棒(回転中心が中心)		棒の長さ l (m) 質量 M (kg)	$= M \cdot \frac{l^2}{12}$	$\frac{l^2}{12}$	棒の幅が長さ(l)の30%以上の時は直方体で計算する
直方体		辺の長さ α (m) β (m) 質量 M (kg)	$= M \cdot \frac{a^2 + b^2}{12}$	$\frac{a^2 + b^2}{12}$	
集中荷重		集中荷重の形状 円盤 円盤の直径 α (m) アームの長さ l (m) 集中荷重の質量 M1 (kg) アームの質量 M2 (kg)	$= M_1 \cdot l^2 + M_1 \cdot K_i^2 + M_2 \cdot \frac{l^2}{3}$ 円盤の場合 $K_i^2 = \frac{d^2}{8}$		その他の形状については上記のK _i ² を参照してください M2がM1に比較して非常に小さい場合はM2=0で計算してよい

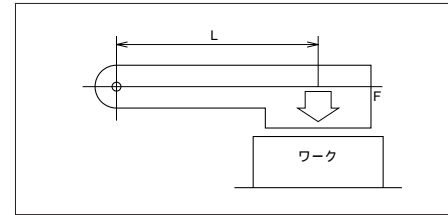
歯車を介する場合は負荷J_Lをロータリアクチュエータ軸まわりに換算する方法

歯車		歯数 ロータリアクチュエータ側 a 負荷側 b 負荷の慣性モーメント JL (kg・m ²)	負荷のロータリアクチュエータ軸まわりの慣性モーメント $H = \left(\frac{a}{b} \right)^2 J_L$	歯車の形状が大きくなると歯車の慣性モーメントを考慮する必要がある。
----	--	--	--	-----------------------------------

ベーン形ロータリアクチュエータの選定例

1. クランプに使用する場合

- アームの長さ L = 0.2 m
- クランプ力 F = 500 N
- 使用圧力 P = 7 MPa



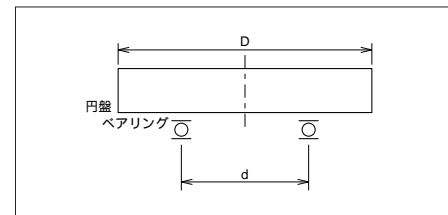
クランプに使用する場合

< 大きさの選定 >

静的トルク $T_s = F \times L = 500 \times 0.2 = 100 \text{ (N} \cdot \text{m)}$
出力特性図(理論トルク)より使用できるロータリアクチュエータは70RV-30D以上である。

2. 円形テーブルを揺動させる場合

- テーブルの質量 M = 50 kg
- テーブルの径 D = 1 m
- すべり軸受の中心径 d = 0.3 m
- すべり軸受の摩擦係数 $\mu = 0.05$
- 揺動角度 $\theta = 180^\circ$
- 揺動時間 t = 3 s
- 使用圧力 P = 7 MPa



円形テーブルを揺動させる場合

< 大きさの選定 >

抵抗トルク T_R を求める。

$$T_R = K \times F_R \times L$$

余裕係数 $K = 2$ とする。

$$\text{抵抗力 } F_R = \mu \times M = 0.05 \times 50 \times 9.8 = 24.5 \text{ (N)}$$

$$\text{よって } T_R = 2 \times 24.5 \times 0.3 / 2 = 7.35 \text{ (N} \cdot \text{m)}$$

加速トルク T_A を求める。

$$T_A = 5 \times \alpha \text{ (N} \cdot \text{m)}$$

慣性モーメント (kg・m²)

負荷の形状は円盤であるため

$$= M \cdot D^2 / 8 = 50 \times 1^2 / 8 = 6.25 \text{ (kg} \cdot \text{m}^2)$$

角加速度 α (rad/s²) の算出

$$\alpha = \theta / t^2 = 3.1416 / 3^2 = 0.35 \text{ (rad/s}^2)$$

$$T_A = 5 \times 6.25 \times 0.35 = 10.94 \text{ (N} \cdot \text{m)}$$

必要トルク T を求める。

$$T = T_R + T_A = 7.35 + 10.94 = 18.29 \text{ (N} \cdot \text{m)}$$

出力特性図(理論トルク)より使用できるロータリアクチュエータは、70RV-15S以上である。

< 許容慣性エネルギーのチェック >

ロータリアクチュエータの内部ストップで停止させる場合

平均角速度の算出

$$\omega = \theta / t = 3.1416 / 3 = 1.05 \text{ (rad/s)}$$

衝突角速度 ω_0 の算出

$$\omega_0 = 1.2 \omega = 1.2 \times 1.05 = 1.26 \text{ (rad/s)}$$

負荷の慣性エネルギー E の算出

$$E = 1/2 \omega_0^2 = 1/2 \times 6.25 \times 1.26^2 = 4.96 \text{ (J)}$$

許容慣性エネルギーより使用できるロータリアクチュエータはない。

クッションを使用する場合

最大吸収エネルギー、最大慣性モーメントより使用できるロータリアクチュエータは70RV-200SC以上である。

< トルク・許容慣性エネルギーによる大きさの選定 >

70RV-100SCを用いて、ロータリアクチュエータのみで揺動させる。

< 揺動時間、ラジアル、スラスト荷重のチェック >

揺動時間 3Sec

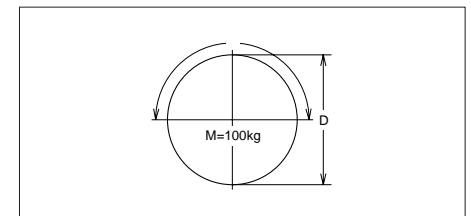
ラジアル荷重 0kg

スラスト荷重 0kg(軸受を使用しているため)

よって、70RV-200SC以上が使用可能である。

3. 円盤を揺動させる場合

- 円盤の質量 M = 100 kg
- 円盤の径 D = 0.5 m
- 揺動角度 $\theta = 180^\circ$
- 揺動時間 t = 5 s
- 使用圧力 P = 7 MPa



円盤を回転させる場合

< 大きさの選定 >

抵抗トルク T_R を求める。

円盤に対して外力は働いていないため、抵抗トルク $T_R = 0$ である。

加速トルク T_A を求める。

$$T_A = 5 \times \alpha \times (N \cdot m)$$

慣性モーメント (kg・m²) の算出

負荷の形状は円盤であるため

$$= M \cdot D^2 / 8 = 100 \times 0.5^2 / 8 = 3.13 \text{ (kg} \cdot \text{m}^2 \text{)}$$

角加速度 α (rad/s²) の算出

$$\alpha = \theta / t^2 = 3.1416 / 5^2 = 0.13 \text{ (rad/s}^2 \text{)}$$

$$T_A = 5 \times 3.13 \times 0.13 = 2.03 \text{ (N} \cdot \text{m)}$$

必要トルク T を求める。

$$T = T_R + T_A = 0 + 2.03 = 2.03 \text{ (N} \cdot \text{m)}$$

出力特性図(理論トルク)より使用できるロータリアクチュエータは70RV-10S以上である。

<許容エネルギーのチェック>

ロータリアクチュエータの内部ストップで停止させる場合

平均角速度の算出

$$\omega = \theta / t = 3.1416 / 5 = 0.63 \text{ (rad/s)}$$

衝突角速度 ω_0 の算出

$$\omega_0 = 1.2\omega = 1.2 \times 0.63 = 0.76 \text{ (rad/s)}$$

負荷の慣性エネルギー E の算出

$$E = 1/2 \omega_0^2 = 1/2 \times 3.13 \times 0.76^2 = 0.90 \text{ (J)}$$

許容慣性エネルギーより使用できるロータリアクチュエータは70RV-700S以上である。

クッションを使用する場合

最大吸収エネルギー、最大慣性モーメントより使用できるロータリアクチュエータは70RV-200SC以上である。

<トルク・許容慣性エネルギーによる大きさの選定>

70RV-400SCを用いて、ロータリアクチュエータのみで揺動させる。

揺動時間、ラジアル荷重、スラスト荷重のチェック

揺動時間 5Sec

ラジアル荷重 100kg

スラスト荷重 0kg

よって70RV-200SC以上が使用可能である。

使用揺動時間

標準形	単位: s	
	90°	270°
70RV 10	0.22~6	0.54~18
70RV 15	0.22~6	0.54~18
70RV 20	0.23~6	0.54~18
70RV 30	0.5~9	0.54~27
70RV 100	0.6~9	0.67~27
70RV 200	0.75~9	0.81~27
70RV 400	1~18	1.08~54
70RV 700	1.8~18	1.35~54

クッション付(クッション部は含まない) 単位: s

	単位: s	
	90°	180°
70RV 10	0.18~6	0.36~12
70RV 15	0.18~6	0.36~12
70RV 20	0.18~6	0.36~12
70RV 30	0.18~9	0.36~18
70RV 100	0.22~9	0.45~18
70RV 200	0.27~9	0.54~18
70RV 400	0.36~18	0.72~36
70RV 700	0.45~18	0.9~36

揺動時間の設定

△注意

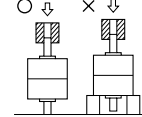
揺動時間は上表の範囲内で使用してください。この揺動時間以上で使用しますとスティックスリップ現象などによりスムーズな作動やクッション効果が得られません。この揺動時間以下で使用しますとロータリアクチュエータが破損する場合があります。

使用上の注意事項

△注意

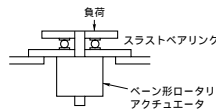
- 本体の取付けには所定のサイズの強度区分8.8以上のボルトを使用してください。また取付けに際しては次のようにしてください。
 - 1) 取付用穴の全てを使用して固定する。
 - 2) ボルトの片締めに注意し、使用ボルト推奨の締付トルクで固定する。
 - 3) ボルトには本体の荷重以外の外部荷重がかからないようにする。(取付部材は剛性のあるものを使用してください。)

図1



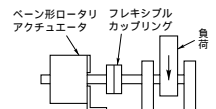
- ベーン形ロータリアクチュエータのシャフトに荷重や継手などを取付ける際には、図1のように力をボディーで受けない方法で取付けてください。

図2 スラスト荷重



- ベーン形ロータリアクチュエータのシャフトの軸方向への荷重(スラスト荷重)は、作動不良の原因となりますので避けてください。スラスト荷重は、図2のようにスラストベアリングを用いてロータリアクチュエータにスラスト荷重がかからない構造にしてください。

図3 ラジアル荷重



- ベーン形ロータリアクチュエータのシャフト先端への曲げ荷重(ラジアル荷重)は、作動不良の原因となりますので避けてください。避けられない場合は、図3のような機構にして、回転力だけ伝達するようにしてください。

- 負荷の質量が大きく作動スピードが早い場合は、慣性力によるショックが発生し、内部のショック受けだけで吸収しきれない場合があります。機器の損傷につながります。このような場合は、緩衝機構(ショックアブソーバ)を設け、慣性エネルギーを吸収してください。
- ベーン形ロータリアクチュエータの取付時及び長期間の休止後の作動時には、空気抜きを実施してください。空気抜きが完全でない場合と作動不良の原因となります。

△注意

故障、メンテナンス等の問題がありましたらご相談ください。分解は絶対に行わないでください。

配管作業上の注意事項

- 配管内にはごみ、パイプの切屑が入らないよう注意してください。
- 配管に当たっては空気溜りができないようにしてください。
- ゴムホースで接続する場合は、規定の半径以下にゴムホースを曲げないでください。
- 配管フラッシングは必ず行ってください。フラッシング後ロータリアクチュエータに配管してください。フラッシングを行わないとゴミのためにロータリアクチュエータの作動不良や油漏れの原因となります。
- ベーン形ロータリアクチュエータには、内部漏れがあります。また、制御回路に使用する電磁弁にも内部漏れがありますので、負荷トルクがかかった状態での中間停止はできません。中間停止を長く保持したい場合は外部に機械的ストップを設けてください。

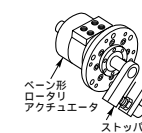
外部ストップについて

図4



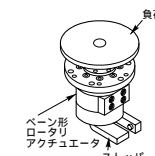
- 外部ストップは、負荷の慣性エネルギーを直接受けるように設けてください。(図4)
- 外部ストップは調整式にしておくとして角度調整に便利です。

図5



- より精密な停止位置が必要な場合は外部ストップを設けてください。外部ストップは調整式にしておくとして角度調整に便利です。また停止精度の確保の点から、できるだけ半径の大きいところに設置することを推奨します。(図5)

図6

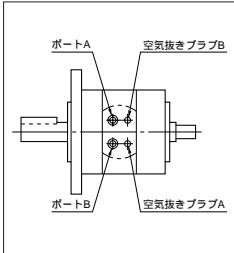


- キー溝側で負荷を駆動し、角軸側に外部ストップを設ける場合は、負荷が許容エネルギー以下であることを確認してください。許容エネルギーを超えるとシャフトの折損につながります。(図6)

空気抜きの方法

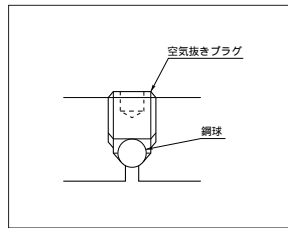
⚠注意

空気抜きプラグを緩めすぎると、空気抜きプラグが飛んだり、油が吹き出しますので注意してください。



●ロータリアクチュエータに低圧の油を送り、ポートA加圧時は空気抜きプラグAを1~2回転緩め(左に回す)、空気抜きを行ってください。同様にポートBに加圧時は空気抜きプラグBを緩め空気抜きを行ってください。

- ロータリアクチュエータ内部に空気が溜まっている時は、空気抜きプラグから白濁した作動油が出ますので、白濁しなくなるまで、繰返して空気抜きを行ってください。
- 空気抜きが完了したら、空気抜きプラグを締付トルクで締め(右に回す)、油漏れがないことを確認してください。〔トルク：8N・m〕
- ロータリアクチュエータ内の空気だけでなく、配管内に溜まった空気も別途抜いてください。もし、空気が残っていると作動不良の原因になります。
- 空気抜きが終わったら、圧力を下げた状態で運転し、徐々に圧力を使用圧力まで上げてください。
注) 70RV-10・15は、空気抜きがありません。



クッションの調整方法

⚠注意

クッション調整時、最初から揺動速度を上げると異常サージ圧力が発生しロータリアクチュエータあるいは機械を破損することがあります。

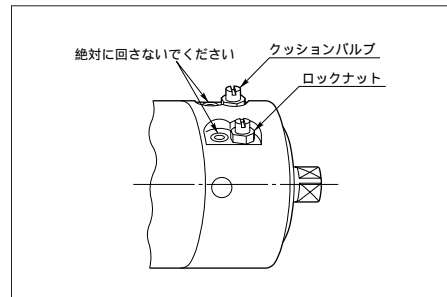
クッションは工場出荷時に調整していますが、揺動速度、負荷の慣性によりクッション減衰効果が変わりますので、次のようにクッションバルブを調整してください。

- ロックナットを緩める。
- クッションバルブを右または左に回して揺動端のスピードを調節し、ショックが小さく動作がスムーズになるようにする。クッションバルブは右に回すと閉、左に回すと開になります。

⚠注意

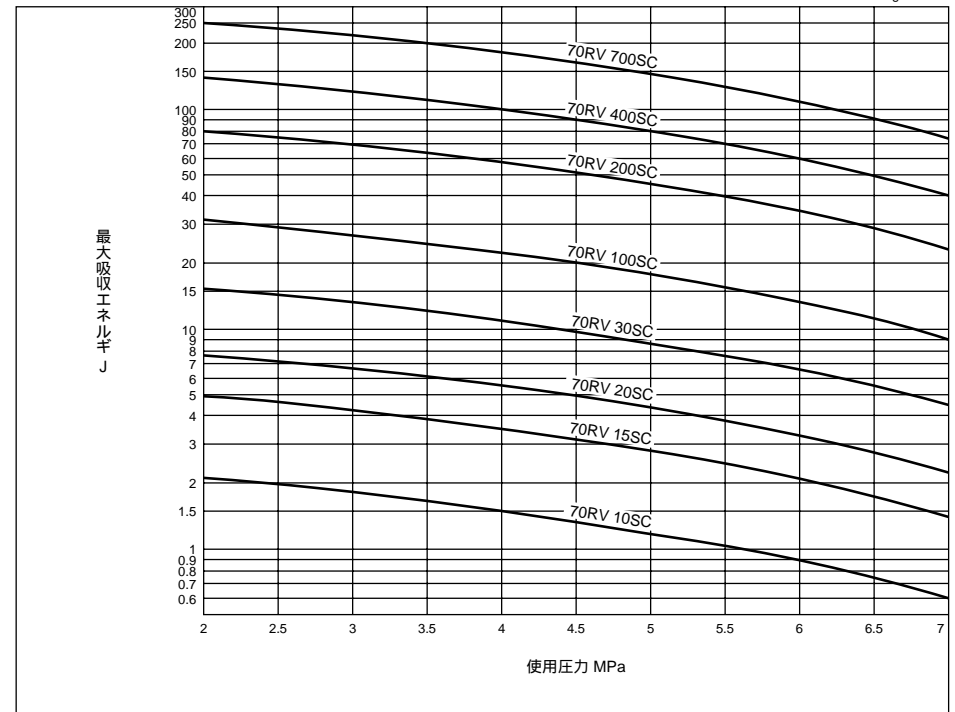
クッションプラグを緩めすぎるとクッションバルブ等が飛んだり油が吹き出したりしますので注意してください。

- 調整が終わったらロックナットを固定する。尚、クッションにより吸収できるエネルギーには限度があります。クッション調整は、フローコントロールバルブ全閉状態から徐々にロータリアクチュエータの揺動速度を上げながらクッション調整を行うようにしてください。
- クッションバルブの隣の止めねじは空気抜き用ではありません。絶対に回さないでください。



クッション付ベーン形ロータリアクチュエータにおける、クッション最大吸収エネルギーと使用圧力の関係図

1MPa=10.2kgf/cm²
1J=10.2kgf·cm



制御回路

軽負荷条件でのベーン形ロータリアクチュエータを使用する場合は、図1の基本回路で制御します。ベーン形ロータリアクチュエータを大きな負荷条件で使用する場合は、図2・3・4に示すような回路を使用し、ショックの防止、およびサージ圧による機器の損傷防止をする必要があります。

ショックおよびサージ圧防止のための積極的な対策としては、図2のような2段減速制御方式を採用し、負荷条件や減速比等に合せて減速時間の調整をします。そのための制御機器としては、パイロット方式の切換弁や比例電磁式制御弁などを採用します。

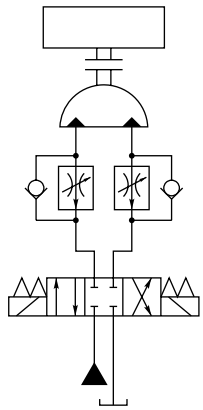


図1(基本回路)

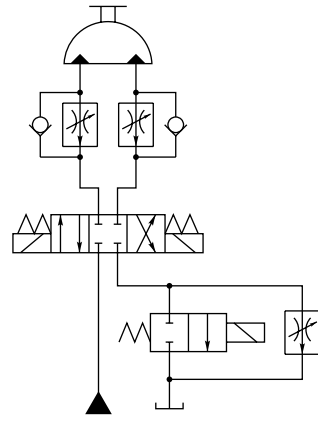


図2(2段減速)

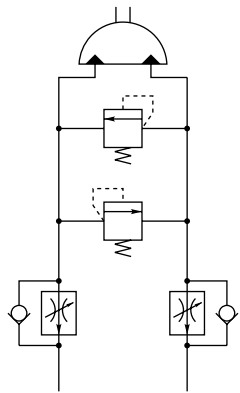


図3(ブレーキ弁)

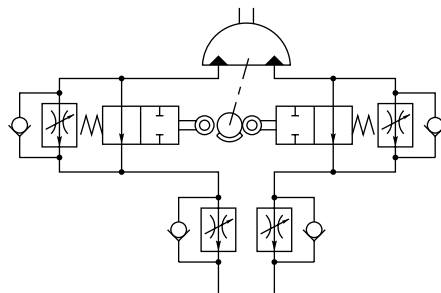


図4(デセレーション弁)